

卒業論文要旨

平塚市の工業の性格

井上 万喜子

都下における桑園集中地の一例

砂川町の桑園依存について

— その変遷と現状 —

伊 木 邦 子

戦後の養蚕業の復興が一時的で、数量においても目覚ましくない結果にとどまり、今後の見通しも暗い全国的な現状にあって、都下の農村では、この養蚕業の衰退に加えて、都心部及び近郊都市の膨張、住宅地の拡大が、農地の減少ばかりか、残る農村の経営内容の近郊農業化を促して、衰勢にある養蚕業の駆逐を一層早めて来た部分も少なくないと思われる。

桑園分布の最大に達した昭和の初期と現在の都下各市町村単位の桑園分布から、養蚕業自体の推移と、地域の変遷という外部的でかつ養蚕に無関係であり得ない現象とが、どの程度、各市町村の桑園分布に表われたかを、専ら統計によって知った上で、砂川町における養蚕自体の変遷と、地域の変貌の養蚕に与えた影響を調べたいと思つた。

砂川町を辿るのは、養蚕業の最盛期には、砂川より以上に養蚕に依存していた多数の町村で戦後の桑園回復が著しくないのに、現在の砂川が、都下で最大の桑園面積を示し、桑園率、養蚕農家率もなく、養蚕依存の比較的大なる地域であるという数字上の特異性及び、行政単位としてほぼ同一の土地条件を有するという取扱い上の容易さばかりでなく、平地農村として立川、福生という小都市に接している上に、市場関係からみても決して都心部と無関係であり得ない位置にあること、などから戦後の農業地域の変貌の一例と